玉川教会たより

NO,477

1月17日

出会って、従った

ヨハネ1：35～51

▼37節。『二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った』イエスさまが、通りかかりましたら、ヨハネの二人の弟子は、ついて行きました。『イエスに従った』のは、単純に興味を持ったということなのでしょうか。矢張り、弟子になったということと、重ねられているのだと考えます。

▼38節。『イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ…『先生』という意味…どこに泊まっておられるのですか」と言うと』これを見ますと、何となく後に従ったのではありません。イエスさまが仰ったように『何かを求めて』の行動です。『どこに泊まっておられるのですか』と聞いたのは、じっくり時間を掛けて話を聞きたいからに違いありません。

▼39節。『イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた』表面的には、好奇心を持ったヨハネの弟子達が、イエス様に宿を訪ねたというだけのことでしょうか。「来なさい。そうすれば分かる」というのも、宿が分かるということに過ぎないのでしょうか。それはあまりに不自然な読み方です。もっと、深い意味が隠されていると読むのが普通でしょう。

▼『何を求めているのか』とは、特別の意味合いで用いられる表現です。福音書に共通して、『何を求めてキリストの前に立つのか』という意味で用いられます。私たちの信仰の姿勢を問う表現です。

『来なさい。そうすれば分かる』たったこれだけの言葉ですが、何しろイエスさまのお言葉です。内容が内容です。決して軽い言葉ではありません。

イエスさまは私たちにも、常に、このように仰っているのではないでしょうか。『来なさい。そうすれば分かる』、イエスさまの元へです。教会へです。

▼36節。『そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った』二人をイエスさまへと向かわせたのは、この言葉です。『見よ、神の小羊だ』。

『神の小羊』とは、出エジプト記に記された出来事を起源を持ちます。戸口に羊の血を塗られたユダヤ人の家だけを、災いが過ぎ越して行きました。血の印がないエジプト人の家では、人間も家畜もあらゆる初子が、命を落としました。この出来事を継承するのが、過越の祭りであり、ユダヤ教最大の祭儀です。

そして、この出来事と、イエスさまの十字架の場面が重なります。イエスさまは犠牲の羊であり、十字架は、十字架の血は、戸口に塗られた血です。十字架に与る者だけが、贖われて、災いを免れ、救い出されるのです。

▼つまり、二人の弟子がイエスさまに従って行ったのは、興味本位でないのは勿論、何か向学心のためでも、求道心の故でもありません。彼らは、救い主を求めて、これに従ったのです。

『何を求めているのか』とは、あなた方は救いを求めているのかという意味であり、『来なさい。そうすれば分かる』とは、イエスさまに従う道だけが、救いに至る道であり、それは十字架への道だという意味です。

▼41節。『彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア…『油を注がれた者』という意味――に出会った」と言った』バプテスマのヨハネが、イエスさまについて証します。それを聞いた弟子二人が、イエスさまについて行き、お言葉を頂います。

この言葉を、アンデレは、自分の兄弟ペテロに告げます。見聞きしたことを伝えるのですが、その見聞きしたことを、彼は、

『わたしたちはメシアに出会った』と表現します。これは、アンデレの証です。

四つの福音書を重ね合わせると、これが、イエスさまに出会った人間による最初のキリスト告白です。

194－0041　町田市玉川学園4の5の32　TEL. 042－732－9321